

## 石神井川・善福寺川谷頭部の花粉化石群集

田中 義文(パリオ・サーヴェイ株式会社)

武蔵野台地を解析する石神井川には三宝寺池、善福寺川には善福寺池があり、いずれも谷頭部の湧水地点である。これらの底泥をボーリングによって採取し、花粉分析を行うことにより、当時の環境復元に関する情報を得る。

善福寺池では、有機質の底泥が 1.2m 採取され、最下部の放射年代は 940BP である。木本花粉はコナラ亜属が多く、マツ属、スギ属、ハンノキ属、エノキ属 - ムクノキ属を伴う。草本はイネ科、カヤツリグサ科、クワ科、ヨモギ属が多い。

三宝寺池では、中央の浮島でボーリング調査を行い、約 2.7m の有機質な堆積物を得た。2m より下位は、木本花粉ではコナラ属が 50%以上を占める。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科が多く、水生植物もみられる。放射年代から、7000～9500 年前とみられる。花粉化石の保存が悪い層位を挟み、1.5m より上では、木本花粉はマツ属が増加し、やがて優占する。テフラ等の時代観から、平安時代には増加し、近世には優占していたことがわかる。草本類はイネ科が多く、水生植物の花粉化石も散見される。近世以降の堆積物では、ハンノキ属とスギ属の木本花粉が多産する。浮島では、7000 年前～平安時代までの群集が得られていないが、中島にかかる橋上から池の底泥を採集した試料は、平安時代以前の層位でモミ属やツガ属が多産する群集がみられる(図は未掲載)。ただし、保存状態が悪いことから、風化に強い種類が選択的に残った可能性もある。

注:放射年代は暦年較正を行っていない。

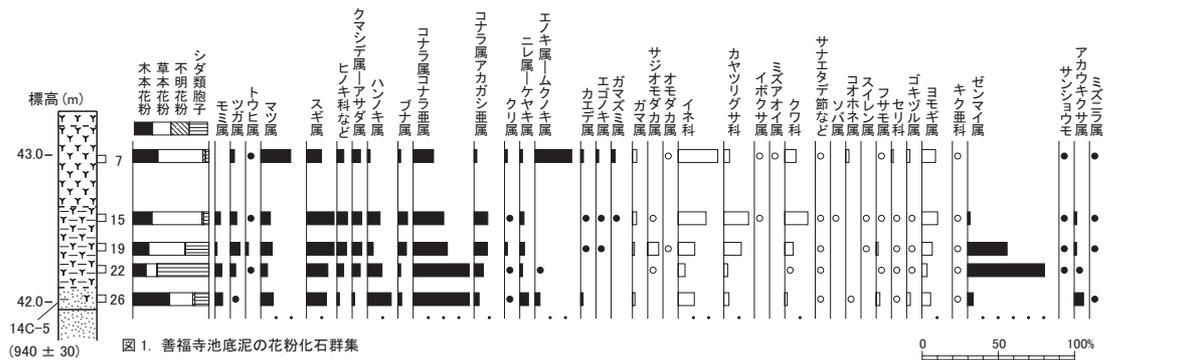


図1. 善福寺池底泥の花粉化石群集

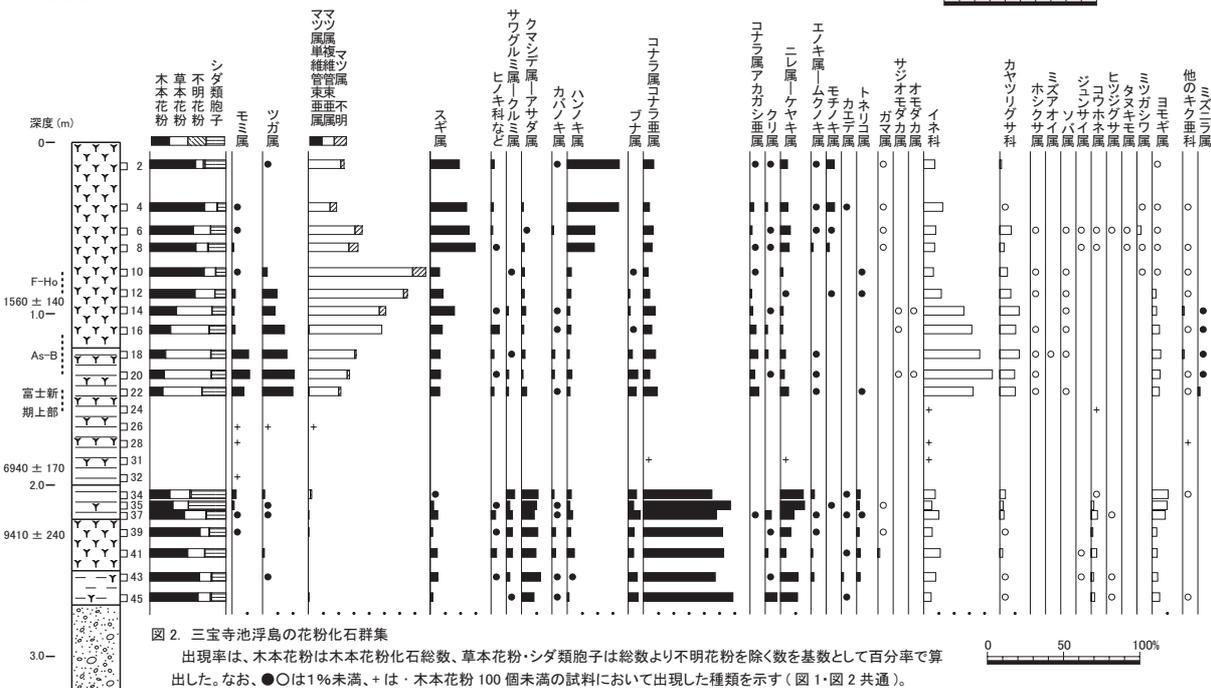


図2. 三宝寺池浮島の花粉化石群集

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は、木本花粉 100 個未満の試料において出現した種類を示す(図1・図2 共通)。